

「スポーツ振興にかける夢～原点を見据えて～」



今年度より、神奈川県体育協会会長に柔道金メダリストの山下泰裕氏が就任されました。平成18年8月31日に行われた「山下泰裕会長と語る会」での会長講話の内容をご紹介します。

私は、熊本県の出身で、小学4年で柔道を始めましたが、当時の私は大変悪かった。母親が、このままでは人から後ろ指をさされる人間になってしまう、柔道をやらせれば少しは良くなるのではないかと考え、柔道を始めることになった訳です。オリンピックで優勝し、金メダルをとった時、同級生から記念品と賞状をいただきました。その賞状には、教室で暴れたことなど幼い頃の数々の悪行が書かれていましたが、金メダルをとることにより多くの感動や夢を与えてくれたので、それらを帳消しにし、今後の友情を約束する旨書かれておりました。私はそれを宝物とし、他の賞状等は飾っていませんが、これだけは、家に飾っております。

素晴らしい柔道と指導者に出会い、私も変わってきました。過去にこだわらず未来を語り、今をひたむきに生きていきたいと考えております。

熊本市にある市立籐園中学校に進学しました。この中学校の柔道部は何年間も公式戦無敗でした。ここで、白石先生という恩師と出会いました。勝負に勝つための「技」の話より、人間として必要な柔道の「道」について繰り返し繰り返し話してくれました。柔道は好きでした。白石先生の教えをしっかりと聞いていけば強くなれる、白石先生は、私にとって神様でした。勝負だけでなく、文武両道である。相手を思いやる、規律を守る、目標に向かって努力することは大切なことであり、社会で活躍できるようになる。人生の勝利者になってもらいたい、これが大事であると教えられました。人の話を素直に聴ける人間になることが強くなるために大事なことであり、とも聴かされました。強くなれば成るほど優しくなれる。優しさが身体からにじみ出るような人間になりたい。

大きな夢を持って、雨だれが一滴一滴岩を削るように、薄い紙を一枚一枚重ねていくように粘り強く夢に向かって頑張っていきたい。多くの人に支えられて夢が現実になりました。

今、夢を持っている子供たち、青少年が少ない。そんな彼らに夢を与え、力強くたくましく育てていくことが、スポーツだったら出来るのではないかと。こういう時代だからこそ、スポーツの果たす役割は大きいと考えています。

高校2年のときに東海大学付属相模高校に転校して以来、この神奈川が大好きであります。神奈川に骨を埋めたいと思っています。東海大学の柔道部で佐藤先生に出会いました。先生からは、先生の言葉よりもその後姿から学ぶものが大きかったです。人間としての魅力を身につけていくため、不断の努力が必要である。自分を磨き、器を大きくすること、人間力を身につけること、人生を通して学び続けることが大切であると教わりました。佐藤先生は、「マムシのと金」と言われました。飛車や角ではなく「歩」であるが努力して「金」になりました。もう一つ教わったことは、人間、後輩や教え子の話にはなかなか耳を傾けないものだが、「誰が言おうと良いものは良いんだよ。」ということ。三つ目は、物事を成せるかどうかは、組織力・総合力だよ、ということ。一人では何も出来ないが、一人が動かなかつたら何も出来ないということ。大勢の理解者を得て、その方々と一緒に手を組んでやっていきたい。

スポーツ界においては、現場の指導者の果たす役割が大きい。選手をやめてから全日本柔道連盟強化ヘッドコーチを8年間やりましたが、余りにも勝ち負けにこだわっていた。勝つという結果を残さない

と何も言えないような全日本柔道連盟の柔道は、柔道の創始者である嘉納治五郎先生が目指した柔道とはかけ離れていました。柔道から学んだものを実社会で生かすから「道」であり、伝統とは、精神・魂を継承してできるものです。創始者の精神を大切に、柔道の原点に立ち返って人づくりを大事にしていこうと、全柔連と講道館が2001年の秋に「柔道ルネッサンス運動」を始めました。私がこの運動の委員長をしておりますが、柔道は教育の一つであると考え、柔道をとおした人間教育を進めていこうと指導者へ訴えかけています。マナーが悪い、モラルが低いと言われた柔道界も変わってきました。

1月に行われたシンポジウムの場で、日本サッカー協会の川淵会長とJOCの竹田会長から「柔道ルネッサンス運動」への協力のお話があり、2月に日本サッカー協会常務理事会で「サッカー心のプロジェクト」を立ち上げることになりました。これは、W杯につながる選手の育成だけでなく、サッカーをとおした青少年の健全育成を実施していこうという動きです。

(中略)

これから、神奈川県体育協会の会長として次の四つの柱を考えています。

1 神奈川から世界に羽ばたく選手を育てたい。

スポーツは多くの人達に夢や希望、エネルギーを与える。WBCでは、横浜高校出身の松坂選手が、トリノオリンピックでは荒川選手が感動を与えてくれた。神奈川から神奈川生まれ、神奈川育ちの選手が世界に羽ばたき、国民に夢や希望を与えてくれるよう、県体協として支援していきたい。

2 スポーツをとおして青少年、少年・少女の健全育成を図りたい。

勝ち負けだけでなく、スポーツの人づくりに果たしている役割を大事にしながら、青少年の健全育成を図っていきたいと考えている。特に、スポーツは指導者の影響も大きい。そのために、寄与できる県体協でありたい。

3 障害のある人たちにもスポーツをする、見る楽しみをもってもらいたい。

私は、パラリンピックの支援、知的障害者のスペシャルオリンピックスの理事を務めている。障害のある方にも神奈川のスポーツ界がもっと門戸を開放していくよう積極的に踏み込んでいきたいと考えている。

スポーツ振興に1ドルお金を使うと、3.2ドルの医療費が削減される。これは世界的な認識である。県内の様々な施設が開放され、使いやすくなり、県民の方々が、今まで以上にいきいきと充実した生活ができるよう、県体協として何かできることはないかと考えている。

4 環境の問題、省エネの問題に取り組んでいかなければいけない。

私は、海、山、自然の豊かな神奈川が大好きである。恵まれた海や山などの自然を次世代に受け継いでいかなければと考えている。昔の日本人は、自分は少し我慢しても次世代のためにと頑張ってきた。省資源、ゴミの問題、環境問題を意識した神奈川のスポーツ界でありたいと思っている。

日本では、幼い頃から物を大事にすることを教えてきた。これはイチロー選手から聞いたことだが、大リーグでは、物を大切にするというより、物は物であって、感謝する気持ちが無い。壊れたり不具合ができれば修理するよりすぐに新しい物を買って使う。プロ野球選手として日本で活躍していた時スランプに陥り、それをバットのせいにしてバットを地面にたたき付けた。今でも、そのバットを自宅に飾っているということでした。そうした心構えがあって今のイチロー選手があるのだと感心しました。

以上の4点を理事会、評議員会でお話させていただき、皆さんの賛同をいただきましたが、これらのことを具現化するためには、現場で多くの方々に取り組んでいただくことが必要です。話だけでは、何も変わりません。一人一人が関わって実践していただくことが大切です。よろしくお願ひいたします。

この講話の詳細は、神奈川県体育協会ホームページに掲載されています。